



なぎさは海のゆりかご

海のゆりかご通信 No.24 Sep.2011

～ 藻場・干潟・サンゴ礁・ヨシ帯・浅場… 「なぎさ」は人と海との共生の場 ～

「なぎさシリーズ」

今回の旅は、北海道根室市の「風蓮湖（ふうれんこ）」。「わが国屈指の野鳥の楽園であり、広大な面積を誇る汽水の湖には、実に様々な生き物が暮らしている。そんな湖の恵みを利用し、ときに生き物同士のバランスを保つために手をさしのべる漁師さんをフリーライターの新美さんが訪ねました。

なぎさシリーズ No.20

日本最東端の地

根室で海を守り続ける漁師たち

新美 貴資

多様な生態系を生み出す風蓮湖

取材の舞台となる風蓮湖（ふうれんこ）は、日本の最東端に位置する北海道の根室市にある。根室といえば、日本で最もはやく朝日を拝むことができる納沙布岬（のさっぷみさき）が有名であるが、風蓮湖も野鳥の宝庫として知られ、世界的にも重要な湿地としてラムサール条約に登録されている。

根室海峡に面する風蓮湖は、海に沿っておよそ 20km 続く大きな湖である。この湖と海との境には、走古丹（はしりこたん）と春国岱（しゅんくにたい）と呼ばれる砂州が発達している。砂州は、海流によって運ばれた砂が長い年月をかけて堆積したもので、この砂州が海を隔て湖ができた。

湖の水は、流れ込む 13 もの河川の水と砂



州の切れ目から流れ込む海水が混ざりあう汽水。水深は浅く干潟が発達し、浅瀬にはアマモなどの水草が、湖岸から後背に広がる湿地にはヨシやアカエゾマツなどが生い茂る。

こうした独特の自然環境が、干潟のアサリや水草の中のエビ、湿地の中の昆虫や小型の野鳥・ほ乳類など多くの生き物を育み、そして根室湾やオホーツクで獲れる様々な魚介類、カモやハクチョウなどの多くの渡り鳥、さらには国の天然記念物でもあるオオワシ、他にもエゾシカ、キタキツネ、ヒグマ、さらには私たち人の暮らしを支えている。

自然がうむ造形に圧倒される

風蓮湖を訪れたのは9月の半ば。中標津町

	都道府県:	北海道
	地域協議会:	北海道環境・生態系保全対策協議会
	活動組織名:	湾中地区干潟保全協議会
	協定先:	根室市
	構成員数:	115名
	対象資源:	干潟
活動内容:	計画づくり、モニタリング、砂泥の移動防止、客土、耕うん、機能低下を招く生物の除去(ヒトデ)、稚貝の密度管理など	



の空港から一步でると、四方は牧草と森の緑でおおわれ、北の大地に足を踏み入れた実感が早くもわいてくる。

今回取材させてもらう湾中地区干潟保全協議会は、風蓮湖だけでなく、その隣にある汽水湖の温根沼（おんねとう）、さらには根室海峡に面した干潟も対象に保全活動を行っている。その面積は広大で、東京ドーム約 117 個分にも相当するから驚きだ。

取材を翌日に控え、同地区の自然をすこしでも体感しておこうと、小雨のぱらつく灰色の空の下、風蓮湖に形成されている砂州の一つ春国岱を散策した。

潮の匂いが若干まじる湿った風が吹きつけるなか、全方位に広がる湿地のなかをゆっくりと歩く。足元の水溜りをのぞくと、たくさん小さな巻貝が砂泥の上にまかれたように生息し、小魚が元気に泳ぎまわっていた。枯れて生気のぬけた木々が、背骨のような幹だけを残し、空を突き刺すようにしてヨシ原の中に立っている。生い茂る植物は、歩くほどに種類や密度、背丈を変え、風景を一変させていく。

静寂な空間が支配するなか、突然前方でなにか動くものが視界に飛び込んでくる。じつと目を凝らすと、仲むつまじい鹿の親子が3頭、のんびりと草をはんでいた。はるか遠くでは、多くの水鳥が群れで羽を休めている。こうした生き物との出会いが、初めて訪れた湿地の光景にさらなる感動をもたらした。

どこを切り取っても絵になる、自然がうん

だ神秘的な造形にただ言葉もなく圧倒される。こうした世界で海とともに生きる漁師とは、いったいどんな人たちなのだろう。期待と興味がさらにふくらみ、胸が高鳴った。

アサリを食べつくす海のギャング

湾中地区干潟保全協議会が行うヒトデの駆除活動に同行させてもらうため、翌朝の5時半に幌茂尻漁港を訪れる。同地区では、風蓮湖を含む地先の海域で数年前からヒトデが異常発生し、漁業資源のアサリやホッキガイなどの二枚貝が捕食され、深刻な被害に見舞われている。

二枚貝は水質浄化の役割も果たす大切な生き物であり、干潟の環境や生態系を保全するため、同協議会では昨年の設立から年4回にわたり駆除を実施し、4トンを超えるヒトデを取り除いた。今年度もすでに2回行い、今回は3回目となる。

朝焼けの空の下、同協議会メンバーのみなさんが乗る漁船に加わり、春国岱の砂州に沿って走り続けること約30分。この日に駆除活動を行う干潟の中瀬へ到着する。すでに他の地区から駆けつけた漁師さんたちが集結し、膝から腰まで浸かってヒトデを一心不乱に取っていた。

私は、ステテコに長靴というかなり浮いた格好を隠そうと、さっそく浅瀬に足を踏み入れる。ひんやりとした海水が膝上あたりまで浸かり、一瞬体が縮こまるも、思ったほどの



ヒトデ! ヒトデ! ヒトデ!
点在する白い粒々は食い荒らされたアサリの子ども



冷たさではない。足元を見ると、すこし黄色がかった大小たくさんの星形のヒトデが底の砂泥にへばりついていて、柄の長いタモやモリ、火バサミなど、それぞれ使いやすい道具を手にして、腰をかがめて黙々とヒトデを取る漁師さんたち。どのカゴもたくさんのヒトデでいっぱいだ。

近くで作業をしていた年輩の漁師さん。ヒトデを取りながら、「アサリがいるところに集まってくる。取ってもとつても増えるから大変」と困った表情を浮かべる。異常発生を続けるヒトデの量は、昨年よりも多いそう。駆除して1週間もすると、以前と同じような状況にまた戻ってしまうというから厄介だ。

浅瀬の底には、殻の開いたアサリが、1センチにも満たない稚貝サイズから大きなものまで大量に散乱している。これらはみんなヒトデによって食べられてしまった身のない空のアサリだ。

大きなものになると、大人の手のひらぐらいにもなるヒトデ。体の一部がちぎれてもすぐに再生する生命力の強さで、一つの個体から何千もの卵を産む旺盛な繁殖力をもつという。「海の色が黄色くなる。気持ちが悪くて入れない」「海のギャング。取ってもまた深いところからいくらでも来る」。あまりの数の多さに漁師さんたちも苦りきった様子だ。

駆除で集めた大量のヒトデは、畑の肥料にするしか使い道がなく、輸送や処理には多額の費用がかかることから同協議会でも頭を悩ませている。

新たな生命を育む干潟

干潟に到着してから約1時間。いつしか頭上には澄んだ青空が広がり、穏やかな日差しが。冷たかった海水もぬるさを感じる。アマモが密生する浅瀬でヒトデを取っていた大石武さん。ホッキガイのケタ網漁を行う漁師歴60年のベテランだ。干上がった浜に腰を降ろし、手で湿った砂を軽く掘り起こすと、5センチを超える大粒のアサリがたくさんの稚貝とともにごろごろと現れ、見せてくれる。

「この干潟で稚貝がわく。アサリの自然の供給場になっている」。遠くを眺めながら穏やかな表情でやさしくつぶやく大石さん。

たくさんのアサリを育む干潟の生産力の大きさに改めて驚かされる。この干潟が、多くの新たな生命を育むゆりかごとなり、湾中地区の漁場の生態系のバランスを保つ重要な場所としてきつと機能しているのだろう。

駆除活動は人手が頼り。この日は60人を超える漁業者が参加し、5時間ほどで1,210kgのヒトデを取り除いた。広大な干潟のなかで行う気が遠くなるような取り組みだが、作業を続けるみなさんの表情にかげりはなく、とても元気で明るい。ともに暮らす地域の絆によって固く結ばれた連帯感が、同協議会の活動をしっかりと支えているとの印象を強くした。

干潟を守り資源の回復につなげる

漁業者が一丸となって干潟を守ろうと、昨



年度に発足した湾中地区干潟保全協議会。干潟を利用する漁業者が中心となってヒトデの駆除の他、砂泥の移動防止や地盤沈下した干潟に採石を敷く「客土」、硬くなった底質をたがやす「耕うん」なども実施。アサリ稚貝の密度管理や分布調査も行い、干潟の維持・保全に力を入れている。

同協議会の代表で、根室湾中部漁協組合長の高橋敏二さんは、「干潟を守ることによって資源を回復させることができれば」と話し、今後の成果に期待を込める。こうした取り組みに対する漁業者の関心も高まっているようで、老若男女の多くのメンバーが参加する活動を見ても、干潟を含めた環境を守ることの大切さが浜に浸透し、しっかり根付いていることがうかがえる。

近年は改善されつつあるものの、未だに続く風蓮湖への人家や牧場からの汚水の垂れ流し、海岸の浸食による干潟の地形変化や海況の変化による不漁など、多くの課題に直面しながらも大自然のなかで共生を図り、海を守

り続ける同協議会の活動をこれからも応援したい。



～ 著者プロフィール ～

新美貴資 (にいみたかし) 氏

フリーライター

水産ジャーナリストの会会員

伊勢・三河湾を中心に漁業・漁村の現状と活性化に向けた取り

組みや魚食普及の活動取材。東海エリアにおける地産地消の情報発信なども手がける。



～ 編集後記 ～

風蓮湖を訪れたのはこれで3度目。いつも道東に出張する際は、時間が許せば、この湖に立ち寄る。なぜか？雄大な自然の中で、野生のタンチョウを観たいからである。九州生まれの私にとって、「鶴の恩返し」に登場するタンチョウは憧れの鳥なのだ。そんな憧れ鳥「タンチョウ」を今回初めてみる事ができた。しかも、つがい、子どももいる！大興奮でシャッターを切りまくる。

この湖には出会いたい鳥がもう一羽いる。国の天然記念物「オオワシ」である。以前、NHKの番組で風蓮湖が紹介された。この中で、餌が乏しくなる極寒の冬のオオワシの貴重な餌が、湖で行われる伝統漁「氷下待ち網漁」で水揚げ時にこぼれる魚であると、「風蓮湖の豊かな恵みと漁師の営みが野生のワシの暮らしを支えている」と放送で語られた。今回出会った漁師さんがまさにその人たちなのである。そして、獲っても獲っても湧くヒトデを漁場を守るために除去し続ける漁師さんの営みもまた、風蓮湖を利用する生き物を支える大切な取組の一つなのだと思う。(吉)



海のゆりかご通信について

漁師さんは、お魚を私たちの食卓に届けるだけでなく、海の生き物を育み、そして海の環境を整える『なぎさ-藻場・干潟・サンゴ・ヨシ帯-』をまもっています。しかし、『なぎさ』は、われわれの暮らしが便利になると引き替えに、近年、減少しました。また、最近の温暖化などによって、その環境や生態系が変化し、更なる危機にさらされています。そうした中、漁師さんなどが行う藻場や干潟をまもる取組を国と地方で支援する「環境・生態系保全対策事業」が平成21年度からスタートしました。

海のゆりかご通信では、この対策事業に参加する『なぎさをまもる』漁師さんや市民の皆さんを紹介します。そして、一人でも多くの方々に身近な場所にある海の現状やそこで暮らす人たちの頑張りを知ってもらい、海や魚を身近に感じ、そして好きになってもらいたいと願っています。

